

《書評》

Ian Biddle and Kirsten Gibson (eds.)
Cultural Histories of Noise, Sound and Listening in Europe, 1300-1918

吉田 瞳

アナール学派の L. フェーヴルが提唱し、A. コルバンが確立した「感性の歴史学」は、今や歴史学のテーマの一つとして定着し、学際的研究も含めて多くの成果が提出されている¹。特に音/聴覚の感性については、前述のコルバンが「音の歴史学」の金字塔ともいえる著作『音の風景』を著したほか、2018年11月には、ルネサンス期から今日にいたるまでの『沈黙と静寂の歴史』を上梓した²。また、「音と声の歴史学」を特集のテーマに掲げた『思想』1111号からは、日本人研究者による研究の進展もうかがえる³。

本書は、過去の人々がいかに音を聴き取り解釈していたか、すなわち歴史的な「聴取の様式」についての論文集である。ただし本書は必ずしも「歴史学」の専門書とはいえない。本書の編者 I. ビドルと K. ギブソンは、英国ニューカッスル大学の国際音楽研究センター所属の研究者で、それぞれ文化理論、音楽史学を専門としている。他の寄稿者もその大半が音楽史学やサウンド・スタディーズの専門家で、なかには文学や建築史学、美術史学を専門とする者も含まれているが、歴史学者の参加は見られない。しかし、本書に収録される論文のほとんどは、史料に残された「音」や「声」に注目し、それらの意味やそれらを必要とした社会の在り様を問い考察するものである。その点で「感性の歴史学」と視角をともにしているといえるだろう。以下、本書の構成を確認したうえで各論考を紹介し、最後に本書全体の視角を振り返りたい。

はじめに本書の構成について。本書には全 12 本の論考が、3 部構成で収められている。詳しい構成は以下のとおり。

序章

第 1 部 歴史化されるオーラリティ

第 1 章 「音とメロディ」

—中世後期イングランドにおける音/音楽の認識をめぐって

第 2 章 オペラの生理学者

—C. ペローの『ざわめき (1680)』とアンシャン・レジーム期の喜びのポリティクス

¹ フェーヴル, L., G. デュビイ, A. コルバン(小倉孝誠編集・訳、大久保康明、坂口哲啓訳)(1997)『感性の歴史』藤原書店。

² コルバン, A. (小倉孝誠訳)(1997(1994))『音の風景』藤原書店; コルバン, A. (小倉孝誠他訳)(2018)『沈黙と静寂の歴史』藤原書店。

³ 岩波書店から 2016 年に出版された『思想』1111 号には、中近世のものを中心に 4 本の「音と声の歴史学」論考が収録されている。

第3章 ジョルジュ・カストネールの『パリの声』(1857年)

—音楽的「そぞろ歩き」の研究

第4章 リズムの再編

—1875～1920年ごろの実験心理学とその周辺

メトロノームの音を聴き取り、働きかけ、反応すること

第2部 音のポリティクス

第5章 演劇人のオルフェウス

—沈黙することと沈黙、アンシャン・レジーム下のフランスにて

第6章 契約そして脅迫としての音

—英国領セイロン島におけるドラミング・集団暴力・植民地法

第7章 大砲と教会の鐘、植民地のポリティクス

—ハプスブルク支配下のボスニア・ヘルツェゴビナのサウンドスケープ

第3部 ヨーロッパ都市のサウンドスケープ

第8章 マクシミリアン1世期の都市生活と世俗的娯楽の音楽

第9章 あの世の音

—近世都市の天国と地獄のサウンドスケープの解説

第10章 1598年の都市の音

—『スキアレティア』に見るE. ギルピンのロンドン

第11章 19世紀のサウンドスケープ

第12章 多孔性と近代性

—1864～1908年のリスボンの聴覚的景観

論文標題に散見される「サウンドスケープ (Soundscape)」とは、カナダの作曲家 R. M. シューファーが提唱した概念であり、音（聴覚情報）を個人や社会が知覚し解釈する対象として捉える視座を提供するものである⁴。空間デザイン論などにおいて実践的に応用されているほか、人類学や文学など多様なディシプリンにも導入されている⁵。歴史学ではあえて言及されることは少ないが、聴覚にかんする「感性の歴史学」と親和性が高いことは明白だろう。

序章 (I. ビドル、K. ギブソン：以下、括弧内に著者名) では本書の目的や意義、先行研究がまとめられている。書名のとおり本書では、中世から現代に至るヨーロッパで見られた「聴取の感性」が分析対象とされたが、ではなぜヨーロッパなのか。编者によると「ヨーロッパ」という概念は中世後期に現われ、近世においては現実の政治単位として機能し、

⁴ マリー・シューファー, R. (鳥越けい子他訳)(2006(1977))『世界の調律—サウンドスケープとはなにか—』平凡社ライブラリ。鳥越けい子(2000(1997))『サウンドスケープ—その思想と実践』鹿島出版会参照。

⁵ 歴史学者による研究の有名なものとしては、Emily A. Thomason(2004) *The soundscape of modernity: architectural acoustics and the culture of listening in America, 1900-1933*, U.S., MIT Press.

さらには、それに内包される国々が支配や文化についての特定のイメージを共有するに至った。そして、筆者の言葉を借りるならば「ヨーロッパ」という実態が「常にすでに存在している感覚(a sense of the always-already-in-placeness)」がヨーロッパの内外の人々のあいだに醸成され、その感覚がやがてフロイトやラカンが呼ぶところの「近代的自我 (the modern personality)」の出現に繋がった。本書における「ヨーロッパ」とは「近代的自我」の生みの親であり、聴取の感性も「近代的自我」の誕生を説明するために検討されているのである。当然、このような視座には問題があるが、それは後ほど指摘したい。

第1部「歴史化されるオーラリティ (Historicizing Aurality)」では、過去の人々がいかに音を認識してきたかが論じられている。「オーラリティ」とは「聴覚性」とでも訳される概念で、近年、表象文化論のなかで「視覚性」の対比概念として用いられている言葉である⁶。より人文学に近い文脈では、「書かれた文字」であるところのリテラシー (Literacy) に対し、「読み上げられ共有された文字」という意味で用いられることもあるという⁷。以下、第1章から第4章まで簡単に紹介する。

第1章「音とメロディ」(L. コルトン) では、神秘主義者 W. ヒルトンや宗教改革の先駆者 J. ウィクリフなど、カトリックの正統教義に属さない4人のキリスト教徒について、彼らがそれぞれ信仰のなかで音や音楽をどう理解していたかが論じられる。中世音楽というとカトリックの教会音楽が連想されがちだが、当論文では非正統的な作品が俎上に載せられ、旧来的なイメージの刷新が図られたといえよう。

第2章「オペラの生理学者」(V. エルマン) では、18世紀フランスで発表された当時最新の聴覚生理学的学説が検討される。この学説の提唱者 C. ペローはアンシャン・レジーム期の建築家として有名だが、同時に生理学者としても活動し、音と聴覚にかんする研究書『ざわめき *Du bruit*』(1680年)を著して、当時主流だったデカルト派の心身二元論に対抗した。当論文ではペローの学説を分析することで、18世紀フランスにおける聴覚と解剖学、音楽美学三者の関係性が描出される。

第3章「ジョルジュ・カストネールの『パリの声』(1857年)」(E. ローランス) では、文筆家・作曲家だった J. カストネールの著作『パリの声 *Les Voix de Paris*』と、それを元に作られたカンタータ (声楽曲) 「パリの叫び *Les Cris de Paris*」とが分析される。カストネールは叫びを言葉や歌の起源と見なし、大都市パリの発展とその聴覚空間の変容が影響関係にあると考えた。そのカストネールが中世から19世紀までの物売りの口上を収集し、音楽作品に仕立て上げたのが前出のカンタータである。筆者は以上の2作品を分析し、それらをカストネールによるパリの歴史的サウンドスケープの再構築と位置づけ、彼の愛国心や反革命的な心性を明らかにする。

⁶ 表象文化論は評者の専門ではないが、「オーラリティ」の一般的理解については以下参照。Jonathan Stern (2010) "Sonic Imaginations", in: Jonathan Stern(ed.), *The Sound Studies Reader*, Abingdon: Routledge, 1-17.

⁷ Joyce Coleman(2007) "Aurality", in: Oxford Handbooks Online. <<<http://www.oxfordhandbooks.com/view/10.1093/oxfordhb/9780199287666.001.0001/oxfordhb9780199287666-e-006>>> (2018/9/15 閲覧)

第4章「リズムの再編」(A. ボヌス)では、メトロノームの登場がもたらした感性の変化が考察される。19世紀に開発されたメトロノームは、演奏者のあいだに「正しいリズムと悪いリズム」という新しい感覚を生み出し、その感覚は20世紀に至るまでにアマチュアから専門家まで、あらゆる層の演奏家に共有されることとなった。ここには主観的で感覚的な従来のリズム感から、客観的で正確な、人間の知覚から独立したリズム感への転換がうかがえる。

以上、第1部では「オーラリティ (聴覚性)」の語のもと、聴取という行為が各時代・地域においてどのように理解されていたのかが考察対象となった。ここで分析対象となるのは、音を聞き解釈するさいの認識枠組自体であるが、思想史寄りの分析は第2章を除いてほとんど行われず、全体的に聴取の実践や実態に注目した分析となっているといえよう。残念な点を挙げるとすれば、第1章と第2章が、2篇とも例外的事例の分析に留まっていたことである。特異な事例を論じるのであれば、各例がそれぞれのメインストリームとどのような関係を持ち、同時代に対しどのような影響力を持っていたのかも明らかにすべきであろう。

第2部「音のポリティクス」では、支配的な権力とその抵抗勢力のあいだに見られた音の利用が論じられる。以下、第5章から第7章について紹介する。

第5章「劇場人 Forains のオルフェウス」(H. ロウ)では、アンシャン・レジーム期のパリにおける劇場規制と、それに対抗するかたちで上演されたパントマイム劇との関係が論じられる。劇場で音が規制されるという事態に対し、劇作家や演劇人たちは「沈黙」を用いて対抗した。その結果、舞台の上で意図的に生み出される「沈黙」が、18世紀における沈黙の意味自体を変質させることとなった。

第6章「契約そして脅迫としての音」(J. サイクス)では、英国領セイロン島で見られた支配者-被支配者間の闘争が注目される。セイロン島で行われていた宗教行列や祝祭ではドラミングが見られたが、英国当局はこのドラミングを「雑音」と捉え植民地法の制定によって法的に制限しようとした。その結果、当局は祝祭の主体であるシンハラ族の反感を買い、その反感は島内の仏教徒(シンハラ族)・ムスリム・キリスト教徒のあいだにあった宗教的な分断・対立とも関連しながらナショナリズムに繋がった。同論文ではプロセッションの音を軸に、支配国-被支配国間の音の感性の違いが浮き彫りにされ、同時に、ヨーロッパ的な音楽美学が非西洋世界に対して持った強い影響力も描き出される。

第7章「大砲と教会の鐘、植民地のポリティクス」(R. P. ペンナネン)では、ハプスブルク支配下のボスニア・ヘルツェゴビナのサウンドスケープが分析される。19世紀のボスニア・ヘルツェゴビナでは、大砲の砲撃やライフルの一斉射撃、教会の鐘といった音が、ハプスブルクによる支配の象徴と見なされ、国家の祭典、特に「皇帝崇拜」の儀礼において多用されていた。しかし、同時にこれらの音はカトリック教会、イスラム教、セルビア東方教会の三つの宗教が交錯する同地特有の音でもあり、さらには、バルカン政策において

三者の均衡を重視するハプスブルク家の姿勢を反映した音でもあった。

第 2 部では音に注目することにより、当局と市民、宗主国と植民地のあいだに見られた緊張関係が描出される。3 篇とも特定の音、あるいは沈黙に注目することで、支配や統制の前後における聴覚情報の意味の変化を描き出していたといえる。従来の政治文化史では、視覚的な象徴が焦点化されがちだったが、これらの論考からは聴覚的象徴の重要性もうかがえるだろう。

第 3 部「ヨーロッパ都市のサウンドスケープ」では、ヨーロッパ諸都市がかつてどのような聴覚空間を持っていたか、ということが議論される。章ごとに内容を追っていきたい。

第 8 章「マクシミリアン 1 世期の都市生活と世俗の娯楽音楽」(H. コフェイ) では、表題のとおりマクシミリアン 1 世期の神聖ローマ帝国を対象に、都市の世俗音楽が分析される。当時のドイツ都市には、参事会から雇用を受ける楽師シュタットファイファーと、そこから外れる「流し」の楽師の両者が存在しており、彼らが結婚式や舞踏といったさまざまな場で活動することにより、都市には複雑なサウンドスケープが構築されていた。

都市の世俗の音を扱った第 8 章に対して、第 9 章「あの世の音」(D. V. フィリップ) では、2 人の神学者の著作物から、キリスト教的な「あの世」のイメージが復元される。中世のイタリアでは生きながら「あの世」を体感するために音楽が利用されており、同論文ではその例として典礼音楽と世俗音楽の両方が議論の俎上に載せられた。ここでいう「あの世」とは天国と地獄の両方を指し、天上の音楽が調和的で多声的な「天使の奏楽」によってイメージされていた一方、地獄の音楽は不愉快で無秩序な雑音によってイメージされていた。筆者は、これらの想像のサウンドスケープごしに現実の音楽が聴取されていたと論じる。

続く第 10 章でも音の描写が議論の中心となる。第 10 章「1598 年の都市の音」(A. ハンセン) では、1589 年に出版されたエドワード・ギルピンの風刺『スキアレティア』を題材に、16 世紀における音の重要性が論じられる。筆者は特にギルピンがどんな言葉、どのような技法を用いて都市の音を「詩的」に再生産し、批判していたかに注目する。

第 11 章「19 世紀のサウンドスケープ」(O. バライ) では、この論集において唯一、史料として 19 世紀リヨンの歴史地図が用いられる。物質としての都市のなかを音はどのように伝わっていくのか。サウンドスケープ概念の発案者シェーファーは、教会の鐘をはじめとする音が都市にどのように広がっていくか「音の地図」を作成して検証したが、筆者は古地図を利用して 19 世紀リヨンの「音の地図」を推定し、アンシャン・レジーム期からオスマンの改造後までのパリのサウンドスケープを考察する。その結果、同時期のパリにおける音の発生地と伝播の変化が浮き彫りとなった。

最終章である第 12 章「多孔性と近代性」(J. シルヴァ) では、19 世紀末以降に進んだ都市リスボンの近代化と、そこで聴かれていた音の工業化が議論の焦点となる。当時のリスボンでは、オスマンのパリ改造をはじめとする他のヨーロッパ諸都市の影響のもと近代化

が進行していた。同論文ではそのような時代状況の中で、新しい娯楽産業と録音技術の発達の関係性が論じられる。

第3部でも中近世から近代までと幅広い時代が議論の対象となる。くわえて分析対象も文字史料に留まらない、古地図や都市景観な手法も取られており、最も学際的な部だったと言えるだろう。

以上、本書に収録される論文の内容を簡単に紹介した。次に、本書全体の視角について検討したい。まず、各章紹介に入る前に言及した本書の問題点について。先述のとおり本書に納められている論考はすべて、ヨーロッパ諸国とその旧植民地を分析対象としていた。編者はこの対象設定の根拠として、ヨーロッパが「すでに常に存在している感覚」こそが、のちに「近代的自我」を生み出したという見解を提示する。編者にとって重要なのは「近代的自我」の出現であり、音をめぐる感性も、この「近代的自我」の出現に、聴覚的要素（音楽、雑音、オーラリティ etc.）が重要な役割を果たしたからこそ重要視されるのである。

以上の「近代的自我」理解がどれほどの正当性を持つのか、その点を判断することは筆者の能力を超える。しかし、哲学的な議論をせずとも上記の対象設定が問題含みであることは自明であろう。よく言われるように「近代的」とは「ヨーロッパ的」であることを意味し、そうであれば「近代的自我を生み出したヨーロッパ」という自己規定は一種のトートロジーに陥っている。また、明文化はされてはいないが、ヨーロッパを分析する理由に「近代的自我を生み出したヨーロッパ」という自己認識を掲げる背景には、ヨーロッパ的な「近代化」を礼賛する「進歩史観」が隠れているように思える。実際、本書に収録された12本の論文のうち、7本が英仏にかかわるものであり、ドイツに関わるものも含めると9本となる。逆にヨーロッパとはいえども、北欧や東欧についての論文は本書のなかにほぼ含まれない。ここから編者たちが想定していた「ヨーロッパ」が、イギリスやフランスを中心とした「近代化に成功した国々」を意味していたことが読み取れる。そのような思考がヨーロッパ中心主義と密接に結びついているのも自明だろう。

もちろん編者たちは序章のなかで、ヨーロッパを分析対象とすることに対し、それがヨーロッパ中心主義に陥りかねないことを自ら指摘し、「ヨーロッパの地方化」に賛意を示していた。しかし、本当に「ヨーロッパを地方化する」のであれば、初めから対象をヨーロッパに絞るのではなく、アジアやアフリカ諸国を対象としたケース・スタディと比較を行うべきだったのではなからうか。ヨーロッパで「アジアのサウンドスケープ」をテーマとしたシンポジウムが開かれ、アフリカを対象とした音楽人類学が展開している今日において、本書の態度は「進歩史観」的姿勢ともあいまって、旧弊を引きずっているように見える。

次に、論文によっては時代背景の考察が不十分であること。たしかに、史料に残された「音」や「声」から、過去の社会の在り様を問うという点において、本書は歴史学における聴覚研究と共通している。しかし、一部の論文において、分析対象と他の関連する同時

代事象との関係性が十分に考察されない向きがあった。ここでは具体的に筆者と最も専門が近いコフエイ論文について批判したい。

コフエイ論文では中世ドイツ都市のサウンドスケープが論じられたが、コフエイは対象を特定の都市に限定することなく、あたかも本論考による考察が都市一般にあてはまるかのように叙述した。しかし、コフエイが利用していた史料は主として神聖ローマ帝国・帝国都市ニュルンベルクのものであり、史料に現れる事象もニュルンベルク固有のものだった。それを過度に一般化して語るとどうなるだろうか。たとえばコフエイは同論文のなかで、ニュルンベルクで開催されていた多様な舞踏（会）について言及しているが、謝肉祭慣行シェンバルトラウフで行われる舞踏と、市庁舎で開催される都市貴族の舞踏を、その背景を詳述せず事実列挙的に扱った。たしかに、前者が肉屋の特権、後者が都市貴族の特権だったことには簡単に言及しているが、両者がどのようにニュルンベルクの社会構造を反映していたかについての考察はない。中世の舞踏と音楽は切り離せない関係にあり、それゆえサウンドスケープの考察のなかで前者が前景化されたのだろうが、このような叙述から導かれる舞踏のイメージは当然不十分なものになるだろう。また、肝心のサウンドスケープについても、当時使用されていた楽器の記号性や法的効果は分析されず、たんに多様な出自の楽師が都市で演奏していたことをして、「中世都市には複雑なサウンドスケープが存在していた」と結論づけられていた。これは「サウンドスケープの分析」といえるのだろうか。

あらゆる時代において音楽や音、声といった聴覚情報は、社会のなかで生み出され、利用され、同時に社会の秩序を形成する一部だった。とくに活版印刷術前後の世界では、聴覚情報が主なコミュニケーション手段であり、メディアが多様化した今でもその重要性は変わらない。そう考えたとき、社会構造から心性まで広く射程を取りうる「音の歴史学」の重要性は明白だろう。本書所収の12本の論考では第3部を中心に、文学テキストから古地図まで幅広い種類の史料が用いられた。こられは歴史的な「聴取の様式」を考察するさいの参考になりうる。今後、歴史学者によるますますの研究の進展が期待される。

(15.9×23.5 cm, pp. 280, November 2016, Routledge, £120.00)

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)